

## 私のWallenberg症候群

### My Wallenberg Syndrome

金沢大学大学院医学系研究科分子細胞病理学  
(病理学第一)

大井章史

医学部3年生の冬学期は基礎配属に充てられている。4-5人の学生を基礎講座に送り込み、そのアカデミックなムードに浸らせ あわよくば、卒業生の基礎離れを阻止しようとする試みである。しかし、山梨医大在任中(日本中の医学部、医科大で同様のことを行っている)の7年間も含めて、このもくろみが成功した例を知らない。むしろ、昨今の大学予算の緊縮化の中で、物質的な貧弱さを見せつけることになり、ますます、臨床科偏重に拍車をかけているように思う。人は追いかけられれば逃げるのが常である。これは恋愛の駆け引きを考えれば明らかであろう。私は、入門を志願する学生が来ても、これをつれなく拒絶し、教授室の前に座り込む学生がいても、無視し続け、三日目の朝にそっと毛布をかけてやり、はじめて志を同じくする者として受け入れたいと思っているが、こんなことばかり言っているのも、まだ、大学院生を一人も確保でき無いです。

さて、基礎配属の最初の1か月間は、学生が午前中に講義があるため、本格的に病理学関係の仕事ができないので、学生と一緒にStephen Goldberg著による“Clinical neuroanatomy made ridiculously simple”を読むことにしている。要は、臨床症状から病変部位をあてるのであって、クイズを解くようなものである。私は神経病理の門外漢なので、その知識は学生諸君と大した差がないが、医師免許を有している分だけ、基礎系科目を終了しただけの学生より優位に立つことができ、楽しい時間を過ごしている。私の最も得意とするのは、延髄外側症候群、すなわちWallenberg Syndromeである。これを基礎配属の学生相手に解説する時は我が至福の時である。そして、必ずこの後にはRaoul Wallenbergの話に移る。R. Wallenbergは杉原千畝、Oscar Schindlerと並びユダヤ人の3恩人の一人であって、もちろんWallenberg Syndromeと何の関係もない。第二次大戦中にハンガリのブタペストのスウェーデン大使館に赴任していた外交官である、私がこの人のことを知ったのは、同名の白黒映画を見てからである。ナチス支配下のブタペストにあって、彼は学校、アパート、倉庫等に次々と青地に金十字のスウェーデン国旗を掲げ(最も、私の見た映画は白黒であったから、これはWorld Cupの影響であろう)、ユダヤ人を収容していく。あるときは、アウシュビッツに向かう列車が待つ駅へ、金十字旗を立てたトラックで乗りつけ、最後の瞬間までユダヤの民を救おうとする。老夫婦が乗り移ろうとした時、彼は言う、「すまない、すべての人を救うことはできない。子供を優先させてくれ」と。老夫婦は「あとをたのむ」と少年に順番を譲り、ほほ笑みさえうかべて貨車の中に消えていく、泣かせるシ

ーンである。

第二次世界大戦中、スウェーデンが中立国であったことを知る学生は20人に一人もいないだろう。これは世界史を受験科目に選ぶ学生の減少によると考えられる。将来の留学を目指す学生の一般教養の欠除が心配であり、世界史を医学部生の必修科目にすればよい。最も、過去にR. Wallenbergのことを知っている女学生が1だけいた。お父上の書齋に彼の伝記があったとのことであった。さすがに、母校の先輩は博学である。

話は変わって十二指腸にはBrunner腺があり、名前が卵巣のBrenner tumorとまぎわらしいが、稀に過形成をおこし生検されてくる。Alois Brunnerという男がいた、いやまだ生きているかもしれないのである。この男もBrunner腺とはなんの関係も無い。ナチス占領下のウィーンにあってAdolf Eichmannの片腕として4万人のユダヤ人をガス室に送りこんだ親衛隊将校である。第三帝国内ではウィーンとブタペストは至近の距離であったであろうから、WallenbergとBrunnerは面識があったかもしれない。戦後、Wallenbergはブタペストの街からソビエト軍の手により拉致され収容所で死亡したとされる。一方、Brunnerは亡命したシリアで、手厚い保護を受けフランス政府の再三の引き渡し要求も拒否されている。イスラエル諜報機関ムサドによるといわれる小包爆弾で片眼を吹き飛ばされながらもしぶとく生き抜いたらしい。

私は1990年から2年あまり、New YorkのAlbert Einstein医科大学Montefiore医学センターに留学した。スタッフの多くはユダヤ人で、病理学主任のKoss教授の御両親と妹君は故郷のポーランドのワルシャワでホロコーストの犠牲になっている。ある時、この老教授がBrunnerの名前で、感情を露に怒り出したことがあったが、これが私がA. Brunnerに興味を覚えたきっかけである。ちなみに、Stephen GoldbergもかつてAlbert Einstein医科大学で教鞭をとっていたことを最近になって知った。

BronxのMontefiore医学センターの近くには広大なWoodlawn墓地があり、この中には、わが郷土の偉人“SAKURA SAKURA”の高峰讓吉博士と野口英世の墓がある。実際に訪れたことはないが、最終的に到達した社会的経済的地位を反映して、両氏の墓の仕様には雲泥の差があるようである。私が基礎配学生を前に、さらに高峰讓吉博士と野口英世の業績について解説するか、あるいは杉原千畝の話にもどるかは、学生の忍耐と私のその日の気分の高揚度によってきまる。これが私のWallenberg syndromeである。